

最終章  
永遠ノ答エ  
【鷗外／明治エンド】

見上げれば、赤い月。夜空にぼっかりと、まあるい穴が覗いている。どこをどう歩いたのか……。喧噪が聞こえる。その方向へと、私はゆっくりと歩を進めた。

「あれ……？」

そうだ、私は日比谷公園にやって来たんだ。今夜は満月だから。でも足を運んだその場所は、いつもの雰囲気とはまったく違う。奥には神社まであるようだった。頭上にはかわいい提灯が連なり、その下にずらりと並ぶ屋台。子供たちがはしゃいでいる。調子はずれな音楽に、道端で芸を披露する大道芸人たち。……どうやら今日は、縁日だったらしい。思わぬ人混みの中で、私はきよろきよろと周囲を見回した。

（チャーリーさんはどこにいるんだろ）

またいつものようにふらりと現れるとは思っただけ。

「やあ、芽衣ちゃん」

案の定、チャーリーさんはどこからともなく現れた。

「いやあ、会えてよかったよ。探しても探しても見つからないから、そろそろ帰ろうかと思っていたところなんだ」

「……勝手に帰られたら困るんだけど」

（危なかった！）

得体の知れないこの人のことだから、約束を反故にされたって不思議じゃない。

「今日がお祭りだったなんて知らなかった」

「満月の夜はね、生き物の血が沸き立つのさ。じつとしてはいられなくなる。そして……」

彼は目を細め、大きく腕を広げた。

「少し不思議なことが起こりやすくなるんだ。僕の奇術が時空の壁を壊し、君をこの時代に運んだようにね」

「その壁、ちゃんと直しといたほうがいいと思うけど……」

これ以上犠牲者を増やさないために、と私はつけ加えた。

「はは、でも楽しかったろう？」

（人の気も知らないで）

気楽そうに話す奇術師に、少し腹が立った。楽しいとか観光気分で語ってほしくない。

「君はこの時代でさまざまな人々と出会った。そして、離れがたいほど、大切な存在だと考える人にも出会ったんじゃないかな？」

なんだか悔しくなって、私はそっぽを向いた。

「……さて、あいさつはこれぐらいにしておいて、と」

居住まいを正し、チャーリーさんは私に向き合った。

「その人は、君にとって大事な人なのかな？ さあ、よく考えて。これは大切な質問だよ？ 君にとってその人は、現代での生活よりも大切なものなのかな？」

「それは……。……。よくわからない」

実はまだ迷ってる。現代に帰らなきゃ……。と思いつつも、この時代に心残りがあるのもたしかだ。

「……。へえ？ あんなに帰りたいた言っていたのに？」

そう、私はつい最近まで、自分が現代に帰ることを選ぶと信じて疑わなかった。

(でも、どうして……。帰らなきゃいけないと思うんだろ？)

家族や友達が待っているから？

生まれ育った世界だから？

すべてを捨てるのは無責任だから――？

(じゃあ、私を好きになってくれたあの人を置いて帰ることも、無責任なんじゃないの？)

私がいなくなったなら、あの子はどう思うんだろう。

私がないこの世界で、私のことを探し回ったりするのかもしれない。

まさか私が違う時代に帰ったとは思わないだろうから。

（――そんなことさせたくない）

私を必要としてくれるなら、そばにいたい。

「誰か、大切な人ができた？」

私はうなづいた。まぶたの裏が熱くなる。

「その人と離れたくないんだね」

もう1度、うなづいた。

たったそれだけの理由で私はここから動けずにいる。私がもう少し大人なら、きっとこんな気持ちに振り回されたりしないのかもしれない。

「それなら、離れなければいいよ」

チャーリーさんは難なく答えた。

「離れたくなければ、離れなければいい。おそらくその人も君と同じことを思っているはずだ」

「……そんなのわからない。簡単に言わないで」

「いいや、簡単な話さ」

「どんなに大がかりなマジックでも、タネあかしをしまえば仕掛けなんて拍子抜けするほど簡単なものなんだよ」

「……？」

説得力があるような、ないような。よくわからないたどえだった。

「信じられない？　じゃあ、これからすごいマジックを見せてあげよう」

「え？」

「芽衣ちゃんだけの特別サービスだ。今から、ここに君の大切な人が現れるからね」

「なに言ってるの」

そんなはずない。現れるわけがない。

「心配しなくても大丈夫だよ。明治だろうが現代だろうが、どこにいたって彼は君のことを大切にしてくれるはずだから」

「チャーリーさんっ」

だんだんと喧噪が遠のいていく。人々の笑い声も、風が木々を揺らす音も。

\*

——赤い月だけが、暗闇を照らし出す。

（チャーリーさん）

私は何度も呼びかけた。

(教えて。あなたは誰なの?)

その問いに答える代わりに、彼はニヤリと道化師のような笑顔を浮かべた。

「幸せになるんだよ、芽衣ちゃん」

ぱちんと、大きく指を鳴らした。

\*

「……芽衣。そろそろ起きなさい」

誰かに身体を揺すられ、私は目を覚ました。

(ん?)

頭上に浮かぶのは満月——ではなく、大きな洋灯(ようとう)だ。それを仰ぎ見るような体勢で、どうやら私は眠りこけていたらしい。

「こんなところで眠っているのは風邪をひく。寝るなら自分の部屋で寝なさい」

「……鷗外さん」

「ああ、もちろん僕の部屋でもかまわないが。……ふふっ」

「……………」

たくらみを秘めた表情で彼は笑う。その発言をさらりと無視して、私はぼんやりとあ  
たりの様子をうかがった。

（ここは鷗外さんの屋敷だよね）

たしかかさつきまで、いや確実に、チャーリーさんと一緒にいたような気がするのだけ  
ど。

私はソファから立ち上がり、カーテンを開けて外を見た。

（欠けてる……）

赤みがかった月はわずかに丸みを失い、夜空を彩っている。

（チャーリーさんは？）

脈絡のないこの状況も、すべてあの奇術師のしわざなのかなと思う。また夕チの悪い  
マジックを仕掛けられてしまった……？

（結局、私はどうなっちゃったわけ？）

「こら、芽衣」

「わ！」

背後から抱きしめられて、驚きのあまり、色気のない声が出た。

「僕の誘いを無視するとは、なかなかいい度胸ではないか」

「いえあの、ちょっとぼんやりしてて」

「言いわけは聞きたくない」

「……っ！」

首筋に齒のあたる感触があった。噛みつかれはしないものの、代わりに強く吸いつかれる。

「お……鷗外、さんっ」

窓ガラスに映る彼は、私の反応を見て愉しげに口元を歪ませた。

「この僕と一緒にいるというのに、僕以外のことを考える余裕があるのかい」

（なんで私、責められてるの……）

「……よそ見をしていいなどと教えたつもりはないのだけどなあ」

首筋に感じる甘い痛み。鷗外さんは優しいけど、たまにいじわるだ。きっと痕が残るほど強く吸いついたはず。

「……ごめんなさい」

なんとなく謝らなければいけないような雰囲気だったので、謝ってみる。

（ていうか私、なにやってるんだろ）

満月の夜は過ぎてしまったのに、どうしてこんなふうにも、鷗外さんの腕のなかにいるんだらう？

「違う」

「は？」

「もっと上目づかいで甘えるように言いなさい。『ごめんなさい』のあとに『あなた』をつけるにより効果的だ」

また妙なことを言い出した。この人の場合、これが冗談ではなく本気だから困る。

「え……嫌です」

「はは、おまえに嫌と言う権利はないのだよ。僕に逆らうなら、これからおまえのことをハニーと呼ぶことにしよう」

「もっと嫌です！」

そんな西洋かぶれな呼び方はやめてほしい。私は断固拒絶した。

「嫌なら僕の言うようにするほかはなからう？さあ言え、言うのだ、かわいらしい新妻を意識して！」

「ご、ごめんなさい、あな……。やっぱり、言えませんっ」

「言うのだハニー！」

「……ただいま帰りました」

「っっ！」

サンルームに入ってきた春草さんが、それはそれは冷ややかなまなざしで私たちを見ていた。

私は慌てて鷗外さんから飛びのく。

「やあ春草、お帰り。今日は遅かったではないか」

とくに気まずそうな様子もなく、涼しい顔で鷗外さんは軽く手を上げる。

「お取り込み中、邪魔してすみません」

「今、彼女に正しい日本語というものを教えてやっていたのだ。言葉の乱れは心の乱れというからね」

「……俺には風紀が乱れているように見えました」

白い目でじろりと一瞥され、あまりの恥ずかしさに赤面してしまった。やがて春草さんは、はあ、と息をつく。

「まあ、いいんじゃないですか。もう夫婦になるお2人ですし」

「え？」

「はは、そう言われると照れるではないか」

(なんで否定しないの!?)

くらりと眩暈めまいがした。私の知らない間に、この世界ではいったいなにが起きたんだろ  
う……? ?

「うん? だから言ったではないか。おまえは僕の、本当の婚約者ファイアンセになったのだと」

夕食後、納得いかないことがありすぎて、私は鷗外さんの部屋を訪ねた。

まともな答えが返ってくるとは思わなかったけど、案の定だ。

「え……それ、事後承諾もいいところだと思うんですけど」

私には初耳だ。承諾した覚えもなかった。

「なにか問題でも?」

「目の前に山積みされてるじゃないですか。第一、私はまだ自分のことも思い出せない状態だし、家柄とか身分とかいろいろ……」

「なにも今日明日にという話ではない。その問題を片づける時間はいくらでもある。それに僕も、僕なりの責任を取らなければ」

「責任、ですか?」

「うむ。僕は独断で未婚の女性を住まわせた。こんな事実がおおやけになれば、今後おま

え自身の縁談に悪い影響が及ぶ」

「ええっ、ないですくないです、悪い影響なんて」

「甘い。言葉は悪いが、状況だけで見るとおまえはすでに疵物だ。きずもの世間の目とはそういうものなのだよ」

——キズモノ。

古めかしくも大げさな響き。つまり私は未婚男性の家に転がり込んだはれんちな女で、結婚相手としては世間的に望ましくないということ……?」

「……でも、だからといって鷗外さんが責任を取る必要はないと思います」

鷗外さんは私に十分すぎるほど親切にしてくれた。世間の目なんて、私にとってはどうでもいい。

「わからない娘だなあ、おまえは」

「？」

「僕はね、むしろ望むところなのだよ。おまえは四の五の言わず僕に堂々と責任を取らせればいい」

そう言い切ると、鷗外さんはぺらぺらとめくっていた本を置き、私の腕を引き寄せた。

「っ、鷗外さん……」

「僕が怖いのかい？」

「え……」

「こんな紳士を前にして、物の怪を見るような目をしているではないか」

……自分で自分のことを紳士とか言ってしまうのは、どうかと思う。

「……私と結婚したって、いいことなんかないですよ」

「そんなことはない。おまえは愛嬌のあるいい子だ。それに前向きで努力家でもある。

自分を日々高めようとする姿勢は実に美しい」

明らかに褒めすぎだ。でも私は単純だから、素直に嬉しいと思ってしまう。

(前向きだなんて言われたの、初めてかも)

おそらく現代では言われたことがない。単に忘れているだけかもしれないけど、そこには新鮮な驚きがあった。

「それにおまえの目は、物の怪を視ることができないではないか。芸術を志す者にとっては、これほど心強い存在はない」

「心強い？」

「そうだ」

「私のこと、気持ち悪くないんですか？ だっておばけが視えちゃうんですよ？」

「馬鹿を言うものではない。魂依は尊い存在だ。現におまえは、化ノ神を小説のなかに戻してくれたのだからね」

そう言いながら、鷗外さんは私の頭を撫でた。

（別に、私が戻したわけじゃないけど……）

私はただ、エリスの残した言葉を鷗外さんに伝えただけ。

でももし、それがなにかの結果につながっているのだとしたら。

（私がここにいることに、少しは意味があったのかな）

別に大きな意味なんていらぬ。ただ少しでも役に立てたのなら、嬉しかった。

「おいで、芽衣」

鷗外さんの腕。鷗外さんの胸。私を必要としてくれる人。

こんな私を『いい子』だと言ってくれる。

（私は、もう――）

カーテンの隙間から覗く、欠けた月。

時が過ぎ去ってしまった今、私はもう現代には帰れない。中途半端に戻った記憶と心残り、これから私を苦しめることになったとしても。

「……かわいそうに。おまえにはもう、逃げ場はないよ」

忍び寄る口づけ。甘く強く、私を縛りつける。

「おまえは僕を愛するしかない。わかっているね？」

——そう。これが私の選んだ答えだ。

\*

「……おはようございます」

「おはよう春草！」

「うんうん、早起きはよい心がけだ。書生たるもの、健全かつ規則正しい生活を続けることがなにより重要だ」

「……鷗外さん」

「なんだい？」

「できれば俺も、起き抜けに家主の裸を目の当たりにするとう、不健全極まりない生活の輪廻からそろそろ脱却したいのですが」

「不健全、だって？ 僕の裸の、一体どこか不健全だと言うのだ！」

「できれば人目につかないところで裸になってほしいと言っているんです。行水するこ

と自体は止めませんから」

「別にどこで裸になってもいいではないか。家主は僕だ」

「それはそうですが……」

「ほら、奥さんも困っているじゃありませんか。明らかに迷惑そうな顔をしています」

「ん？」

「……」

私が2人のやりとりを物陰から見ていることは、春草さんにはとっくに気づかれています。たようだ。

(鷗外さん、ほんとあいかわらずだなあ……)

……鷗外さんと夫婦になった今でも、その前から。彼はずっと、マイペースを維持しただけだ。

「こら、なぜおまえはそんな困ったような顔をしているのだ。僕の妻なのだから、堂々と振る舞いたまえ」

「……妻でも恥ずかしいことはあるんですが」

「なにが恥ずかしいのだ！ さあ、もっと堂々と！」

人前で堂々と裸になっている夫を前にして、妻が堂々とできるわけがない。

「日中から堂々と夫の裸を凝視する妻というのも、どうかと思いますが」  
春草さんの言葉に合わせて、私もうんうんと頷いた。

「夫婦なのだから構わないだろう。僕はね、夫婦というものは、一切の隠しごとがない  
関係が理想だと常々思っているのだ」

(隠しごとってそういう意味じゃないよね……)

「鷗外さんはあけっぴろげすぎるんです」

「……まあいいです。俺はもうじきアメリカに行きますし、これからはいくらでも  
夫婦仲むつまじくしてください」

「……ああ、そういえばもうそんな時期だったか」

鷗外さんは少し真面目な顔になってから、腰に手をあてた。

「アメリカだけではなく、欧州もまわる予定なのだろうか？」

「はい。岡倉天心先生と横山大観先生も一緒に」

画家の春草さんはもうじきアメリカに留学することが決まっている。

少しずつ仲良くなってきたのに、離れ離れになってしまうのはやはり寂しい。でも私  
以上に寂しいのは、きっと鷗外さんのほうだ。

「そうか……。しかし、おまえがいなくなると、この家も寂しくなるなあ……」

裸で桶の前にしゃがみ込み、肩には手ぬぐいという、あまり様にならない姿で、感慨深げに目を伏せた。

「いつまでも新婚生活を邪魔するほど、俺も野暮ではありませんよ」

「それでは、学校へ行って来ます」

「ああ。気をつけて行ってくるのだよ」

春草さんはかばんを持つと、せわしなく部屋を出て行った。

パタン、と扉が閉まる。

そしてサンルームには、私と裸の鷗外さんの2人だけが残される。

「新婚生活か……。しかしどういいうわけか、あまり新婚という感じがしないなあ」

「うーん、確かにそうかもしれません」

新婚生活で私が想像していたのは、『お風呂にする？ ごはんにする？ それとも……』

といったベタな甘いものだ。

この時代と私の時代では新婚のイメージに差異があるかもしれない。でも、それだけのせいではないように思う。

「おまえもそう思うかい？ やはり、結婚前から一つ屋根の下で生活をともにしていたせいだろうか」

「きつと、それだけと思います」

「ふむ……このままではいかん。我々はもっと夫婦らしくあるべきだ。夫婦としての円熟味を増幅させなければ！」

「へっ？」

いきなり鷗外さんが立ち上がり、ずかずかと私に近づいてくる。

「ほら、もっと僕にくつつきたまえ」

「ちょ、ちょ、ちよっと待ってください。いきなりなんですか」

「なにを恥ずかしがっているのだ。夫婦なのだからくつつくのは当然のことだろう？」

「いやいや、その前に服を着てください！」

「はっ。くだらない。僕は布一枚ですら、おまえとの隔たりを作りたくはないというのに」

彼は、ほぼ生まれたままの姿で私に迫ってくる。完全に裸というわけではないけれど、それでもその布一枚の隔たりはかなり心許ない。

「いいから、早く着てください！」

私は椅子の背たれから着物をつかみ取ると、鷗外さんに押し付けた。

「……そうか、しかたない。わがままな妻め……」

「さあ、これで文句はないだろう」

服を着ていることがさも偉いような顔でふんぞり返り、鷗外さんはあらためて私の前に立った。

窓から差し込む朝日を背に、鷗外さんの長身がくつきりとした輪郭を浮かび上がらせる。着物のあわせから覗いた胸板は厚く、半裸だったさつきよりも、なぜかドキドキしてしまう。

「春草がいなくなるのは寂しいが、これからは夫婦2人きりだ。その新婚生活をゆっくりに堪能しよう」

「……ほら、おいで」

「……………」

広げられた腕の中に軽く飛び込むと、大きなぬくもりに包まれる。新婚生活らしくない……なんて思っていたけど、実はそんなことなかった。だって、ただの同居人では、朝から人目もはばからず、こんなことはできないはずだから。

「……ところでおまえは、『おはようのキス』というものを知っているかい？」

「おはようのキス？」

「西洋では、朝起きると妻が夫に『おはようのキス』をするらしいのだ。我が家にもその

文化を取り入れたいと思う」

「えっ……でもここは日本だし。わざわざ取り入れなくても」

「ほう……なかなかおまえも言うようになったではないか」

「う……！！？」

鷗外さんは両手で私の頬を包み、むにゅつと軽く押しつぶしてきた。

唇が前に押し出されて、たぶんかなりマヌケな顔になっているはずだ。

「僕とて西洋文化の猿真似は好まないが、これからの時代、異文化の見習うべき部分は進んで生活に取り入れるべきだと思うが？」

「む、うう、はなひてくらはい！」

「おまえがきちんと返事をすれば離す。ただし、僕の理想の答えならばの話だが」

「わ、わかった、わかりまひたから！」

「うむ、わかればいい」

手を離されてほっとしたのも束の間、鷗外さんがニヤニヤしながら顔をのぞき込んできた。

「わかったのなら……どうするんだい？」

「……」

「さあ、どうするんだい？」

私は軽く爪先立つと、無言のまま、愛しい人の唇に自分の唇を合わせた。

「……」

(……恥ずかしい)

「……ふむ……『おはようのキス』というのもなかなか悪くない。むしろ良いものだ。これからは忘れず毎朝するように」

「ええっ！ ま、毎朝!？」

「なんだ、嫌なのかい」

「い、いえ、でも、もし忘れたらどうするんだらうって思っ……」

我が意を得たりとばかりに、鷗外さんの目が光る。

「もちろん、お仕置きだ。夫婦としての義務を忘れるような妻は、しっかりしつけ直すなくてはならないからね」

(すごく楽しそうなんですけど……!)

これはきつと、あれこれ趣向を凝らしたお仕置きを考えてきそうだ。

「嫌なら、今からしっぴかり練習しておくのだ」

鷗外さんは軽く屈み込み、口づけを求めてくる。私は観念すると、再び唇を合わせた。

「……ほら、もう1度」

「ん……」

「……もう1度……」

「ああ、思い出した。そういえば西洋の文化には『おやすみのキス』というものもあるらしい。もちろん我が家にも取り入れるだろう？ ……奥様？」

「し、知りません……」

私の旦那様は頭がよくて、優しくて、少しだけ意地悪で――。

誰よりも私を愛してくれる、誰よりも素敵な人だ。

（ F I N ）